

## キリスト教と現代日本人の生活

曹 榮（北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所 博士生） CAO Rong

2006年9月2日から15日まで、私は神奈川大学21世紀COEプログラムの訪問研究員として、日本で二週間の訪問研究を行なった。今回の訪問研究のキーワードはキリスト教と日本文化の交流あるいは触れ合いである。佐野賢治教授の指導の元、劉湯氷氏、永田衣紗氏の協力を得て、山手教会・横浜外国人墓地・フェリス女学院大学・澤田美喜記念館・上智大学・横浜中華街などを相次いで訪問した。訪問、参観、関連資料の調査を通じて、日本へのキリスト教伝播の歴史と現状、及びキリスト教と日本文化との出会いと交流に対してある程度の理解を得られた。本文では主に調査資料に基づいて、キリスト教と日本人の生活について、簡単に述べてみたい。

現在、キリスト教は神道、仏教と共に、日本の三大伝統宗教の一つである。訪問中、私はよくこのような言い方を耳にした。「日本人は、生まれた時は神道信者で、結婚する時はキリスト教徒、死ぬときは仏教徒である。」この言い方は日本人の宗教に対する態度の一種の反映のみならず、キリスト教が日本人に与えた影響の一側面を表している。キリスト教文化の一部が既に多くの日本人の日常生活の中に入り込んでいる。キリスト教の多数の祝日が、多くの一般的な日本人に知られている。例えば、クリスマス、イースター、聖母の被昇天日等。日本の多くの家庭では、キリスト教徒がいなくてもクリスマスを祝うし、教会で結婚式を挙げる若者も多い。しかし、キリスト教が普通の日本人に与えた影響は神道・仏教ほど直接的ではない。キリスト教文化の多くは日常生活にさほど深く入りこんではおらず、神道と仏教こそが伝統的な風習となっている。

日本のキリスト教徒の数は多くないが、日本社会に与える影響は大きい。フェリス女学院大学のある教授によれば、日本のキリスト教の発展はゆるやかなものだが、多くの信者は良好な教育を受けた上層社会の人々である。よって、その人々が社会に与える影響は計り知れない。

キリスト教徒は一般に、日常生活の中でもキリスト教の儀式に従うことで人生儀礼と宗教的な生活を全うする。冠婚葬祭の面でも非キリスト教徒とは異なる特徴が見受けられる。特に葬儀の場合、一般に日本人は皆喪服を着るが、キリスト教式の場合、喪服を着る習慣はなく、多くは亡くなった日から一ヶ月後の「昇天記念日」に納骨または埋葬する。日本の

教会には墓地を持っているところが少ないため、多くの信徒が一般的に非キリスト教徒と一緒に埋葬される。伝統的には男性が亡くなったら、家族の人と一緒に埋葬される。だが、もし男性信徒が信徒ではない家族と一緒に埋葬されることを望まないときは、家族にその旨を伝えることで、宗教上の断絶が発生する。妻は夫の許可を得てから墓を移すことができる。従って、キリスト教信者たちは往々にして、キリスト教と日本伝統文化の間で選択と調和を図ることを余儀なくされている。

キリスト教は日本の教育面に大きな影響を及ぼしている。特に、下層社会と女子中学教育において著しい。今日に至るまで、多くの私立中学、女子大学、私立大学がキリスト教徒によって創設された。横浜だけでもフェリス女学院大学、横浜共立学園、成美学園（現・横浜英和女学院高等学校）などのキリスト教系学校がある。しかしキリスト教系学校とはいっても、学校の中のキリスト教教育的な色彩は決して濃くない。フェリス女学院大学のある教授によると、キリスト教系学校でありながら、教授の宗教の授業は四コマのみである。一クラス約四十人のうち、キリスト教徒は多くても十数人しかいない。牧師になる人の数も少ない。学生がキリスト教系学校を選ぶ理由のひとつには、その安い学費もあげられよう。

キリスト教は、神道、仏教と並ぶ日本の三大宗教の一つでありながら、普通の日本人にとっては依然として少数派で、西方文化のひとつの記号に過ぎない。日本のキリスト教徒は、キリスト教徒としての自分と日本の伝統文化との関係を、現実社会の中で調和させなければならないのだ。

カトリック山手教会



横浜外国人墓地



\* 本稿は中国語で提出されたものを劉湯氷（RA）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。